

R-GIRO 研究プログラム 進捗・研究成果報告書（第6回）

(2015年4月1日～2015年9月30日分)

(1) 基本情報

拠 点 名	文理融合による法心理・司法臨床研究拠点（法心理・司法臨床センター）
拠 点 リ ー ダ ー	政策科学部・教授 稲葉 光行
実 施 体 制	第1グループ：「法心理の原理探求と新領域展開」, 文学部・教授 サトウタツヤ 第2グループ：「裁判員裁判の法心理」, 政策科学部・教授 稲葉光行 第3グループ：「被害者支援」, 法務研究科・教授 松本克美 第4グループ：「司法臨床と治療的司法」, 産業社会学部・教授 中村正 第5グループ：「視知覚に関する心理学鑑定技術と法理」, 情報理工学部・教授 篠田博之

(2) 拠点形成の研究成果（拠点全体） 運営委員会以外には開示しないことを希望する

顕著な研究成果	<p>(1) コンピュータを用いた供述調書分析システムの実用化(稲葉光行, 2015, 海外発表)</p> <p>本拠点第2グループは、コンピュータによる視覚化技術を用いた新しい供述分析手法とシステム開発に取り組んできた。またこの技術を元に供述調書への意見書を裁判所に提出してきた。今期に結審した裁判で初めて公判中にこの手法の分析が取り上げられるなど、実用化に向けて大きな進展があった。</p> <p>(2) 子の氏の変更許可に関する判断基準の提言(金成恩, 2015, 査読有論文)</p> <p>専門研究員の金成恩氏は、子の氏名権の問題について、ジェンダー平等性と人格権保護の観点から検討し、家族観や伝統文化と切り離れた新しい氏変更制度と判断基準を提言した。</p>
主な研究成果 (3件以内)	<p>(1) 法律や裁判に対して市民が認識する「違和感」の類型化(山崎優子他, 2015, 国内発表)</p> <p>客員研究員の山崎氏は、市民が司法に関して持つ違和感を1,030人を対象に調査し、因子分析によって構成要素を明らかにした。また違和感の傾向が年齢・性別・職業によって異なることも示した。</p> <p>(2) 見かけの明るさと影の知覚に関する視知覚工学的解明(Tokunaga, R. et al., 2015, 海外発表)</p> <p>専門研究員の徳永氏は、人間の明暗の認知に焦点をあてた視覚実験に基づき、見かけの明るさと影の知覚メカニズムを明らかにした。目撃証言鑑定の手法などにつながる可能性を持つ研究である。</p> <p>(3) 発達段階における被服行動に関する文化心理学的解明(木戸彩恵他, 2015, 査読有論文)</p> <p>専門研究員の木戸氏は、女子大学生10名への半構造化インタビューと文化心理学の視点からの分析を行い、発達段階における被服行動の意味づけとその変遷過程を明らかにした。</p>
若手研究者の 育成結果	<p>1) 木戸彩恵: 図書/論文/学会等発表(11件)。震災レジリエンス, 被服心理学, 国際共同研究推進等。</p> <p>2) 斎藤進也: 論文/学会等発表(5件)。法情報視覚化ツール開発。社会実装にむけた共同研究等。</p> <p>3) 金 成恩: 論文/学会等発表(4件)。韓国での性的虐待被害と回復支援, 氏変更問題調査等。</p> <p>4) 川本静香: 論文/学会等発表(2件)。自殺予防教育プログラム, うつ病の認識研究等。</p> <p>5) 山崎優子: 論文/学会等発表(1件)。法心理分野での各種実験企画・実施・データ分析等。</p> <p>6) 徳永留美: 論文/学会等発表(6件)。法心理学の視点からの目撃証言・視知覚鑑定実験実施等。</p> <p>7) 若林宏輔: 論文/学会等発表(3件)。裁判員評議分析法開発等。'15年度から本学文学部准教授。</p> <p>8) 安田裕子: 論文/学会等発表(6件)。被害者支援実践研究等。'15年度から本学文学部准教授。</p>
大型国家プロジェクトの採択 結果	<p>1. 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 (H25-H27) (文部科学省) 「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学=実〉連携型研究」, 稲葉光行 (代表), 計 3,600万円 (H27年度分)</p> <p>2. 科学研究費補助金・新学術領域研究 (H23-H27) (文部科学省) 「三次元地層モデリングを用いた供述過程の可視化システムの構築」, サトウタツヤ, 計 1,340万円</p>
拠点形成の取組 みの課題	<p>① ワンストップサービスの複数キャンパスでの展開について学内調整のご支援をお願いしたい。</p> <p>② 海外研究者・実務家との連絡や国際シンポの開催等支援等, 引き続きご支援をお願いしたい。</p> <p>③ 事務局のネットワークをもとに企業とのマッチングやニーズ発掘について引き続き指導を頂きたい。</p>

(3) 研究進捗の状況 (グループ別)

① 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第 1 グループ	法心理の原理探求と新領域展開
メンバー (所属)	<p>グループリーダー：サトウタツヤ (文学部)</p> <p>チームリーダー：渡辺千原 (法学部)</p> <p>拠点研究員：嘉門優 (法学部)</p> <p>拠点研究員：松宮孝明 (法務研究科)</p> <p>拠点研究員：篠木涼 (日本学術振興会)</p> <p>拠点研究員：藤田政博 (関西大学)</p> <p>拠点研究員：荒川歩 (武蔵野美術大学)</p> <p>拠点研究員：大谷通高 (先端総合学術研究科/院生)</p> <p>拠点研究員：滑田明暢 (滋賀大学)</p> <p>拠点研究員：神崎真実 (文学研究科/院生)</p> <p>専門研究員：木戸彩恵 (R-GIRO/専門研究員)</p>
研究実施場所	創思館 413 号室
内 容	<p><u>①研究の進捗状況</u></p> <p>このグループでは、法心理・司法臨床センター設立に寄与する概念的・制度的な研究を実施している。そこには、情報的正義概念の構築、環境犯罪 (犯罪をしやすい環境が存在するか・また、犯罪を抑制するにはどのような環境にすべきか)、ライフ (生命・生活・人生) と法心理的支援などのテーマが含まれる。</p> <p>2015 年は、センターの学術的貢献のなかでも、法心理・司法臨床センターが主催する東アジア法と心理学会の開催が大きな課題となる。また、センターの実践的な活動として、研究者、実務家、市民のための法心理・司法臨床に関する総合的ワンストップサービスのための知見統合が目指される。</p> <p>第 1 グループでは、第一に、これらの課題に、過年度の、「問題解決型学融の理論の構築」と「社会問題と法の連携の過去事例の検討」を基礎づけて取り組んでいる。第一に、本拠点では、法心理学に携わる人を繋ぐための人的・組織的ネットワークの構築に取り組んでいる。被災者・被害者に対する意識調査やインタビュー調査を行い、質的手法を元に心理メカニズムを考える枠組みについて研究している。その際には、レジリエンスをキーワードにしている。</p> <p>第二に、補償に役立つ知見を探求するため、京都弁護士会のカネボウ白斑研究会との連携を行い、調査研究を進めている。個人の人生と化粧品による被害の関係を、関係性の障害という観点から捉え、法心理学の新しい領域へと研究を展開している。</p> <p>第三に、法心理学を心理学史の中に位置づける試みを行い『心理学の名著 30』の中でロフタス著『目撃者の証言』やギリガン『もう 1 つの声』の心理学史的意義を考察した (刊行は 2015 年度後期)。その上で、日中の法心理学史の精緻化のため、一次資料の読解を行い国内外で学会発表を行った。今後は、法心理の心理学史をまとめるべく研究を計画している。</p> <p><u>②拠点形成に向けた取組み状況</u></p> <p>日本で唯一、アジアで随一、世界で有数の法心理・司法臨床センターの設立を目指すために、以下のような取り組みを行っている。今年度前期は特に、10 月 16~18 日に開催する東</p>

アジア法と心理学会に向けた準備を進めてきた。

【学内】創思館2Fにて国内のワンストップサービスとしての法心理・司法臨床センターを運営が開始された。また、4人の拠点所属研究員がR-GIRO若手研究者育成の取り組みであるライスボールセミナーにて、それぞれ研究発表を実施した。

【近畿圏】京都弁護士会・大阪弁護士会との連携をおこなっている。情状鑑定やその他の鑑定を通じたつながりをもつことが目的である。

今年度前期には、京都弁護士会のカネボウ白班問題弁護団に協力をえて、専門研究員の木戸氏が原告のインタビュー調査研究を実施した。また、弁護団からの要請により9月に弁護団集会での研究進捗報告を行った。これを通して、弁護士との連携が実現しており、裁判資料として研究結果を提出することが期待されている。

【日本】南山大学・岡田教授、九州大学・田淵教授らと、裁判員裁判における展示証拠（プレゼンによる証拠提示）の刑事訴訟法的検討を行っている。

また、東アジア法と心理学会では周防正行監督の講演及び映画上映会を予定しており、すでに多くの一般参加者の来場が予想されている。

【東アジア・環太平洋】本学・茨木キャンパスで第9回東アジア法と心理学会に法心理司法臨床センターを実施する予定である（10月16日-18日開催）。

本年度は、7つのキーノート、27の口頭発表、8つのポスター発表が予定されている。また、日本・中国・韓国以外にも、シンガポールやオーストラリアなど新たな参加国からの参加者が予定されている。

【北米・南米・欧州】日中の法心理学史について、一次資料の読解を行い国外での学会発表を行った。

以上のような活動を通じて、法心理・司法臨床センターが国内外の実践家・研究者が集う拠点として機能するように尽力している。

③若手研究者の育成状況

本グループの若手研究者として、専門研究員1名（木戸彩恵氏）と拠点研究員3名（滑田明暢氏（滋賀大学）、大谷通高氏（先端総合学術研究科/院生）、神崎真実（文学研究科/院生））が参加している。

神崎氏は8月から10月にかけて2ヶ月間にわたり、デンマークのAalborg大学Valsiner教授のもとで在外研究を行っている。また、滑田氏は科研費「夫婦の相互作用と生活家事遂行の過程の理解：個別具体的プロセスの記述に基づいた検討」を得て、公正感の法心理学的検討を行っている

専門研究員として木戸氏は、本年度前期は、化粧品使用に由来する容貌のディスフィギュアメントについて、被害者支援のための理論構築を実施する研究を中心に研究をすすめた。また、震災に関わる研究も引き続き実施しており、総じて研究に意欲的に取り組んでいる。

第一に、化粧品使用に由来する容顔の変容と法心理学的観点とを融合させた問題として、カネボウ白斑問題の理論的考察に取り組んでいる。今期の成果として、学内資金を2枠獲得し、インタビュー調査および被害者支援のためのガイドライン作成に取り組んでいる。実際には、京都弁護士会との連携により調査を進めている。調査の結果は、本年度後期をめぐりに論文としてまとめ上げる。

第二に、被災者のレジリエンスに関する震災に関わる研究として震災後の被災地のフィールドワークを続け、仮設住宅に住む人々の認識とコミュニティの再構築についての理論化を試みている。

専門研究員の業績

・論文

1. 木戸彩恵・荒川歩・鈴木公啓・矢澤美香子, 「幼児期から青年期にかけて衣服を選び、着る行為の変容 —女子大学生を対象としたインタビュー調査から—」, 『立命館人間科学研究』, 32, pp. 85-104. (2015)

・図書

1. 木戸彩恵, 「グルーミング」, 高瀬賢吉・柳井修一・山口哲生 (監訳), 『ラットの行動解析ハンドブック』, 西村書店, 2015年9月21日
2. 木戸彩恵, 「自由度の高い学会誌と学会に育てられて」, 日本パーソナリティ心理学会20年史編纂委員会 (編) 『日本パーソナリティ心理学会20年史』, 福村出版, pp. 190-191, 2015年9月5日

・国外での発表

1. Kido Ayae, “An examination of socio-cultural development and cosmetic behaviour/consciousness: Cosmetic assumptions among different life-stages and cosmetic behavior/consciousness in elderly women,” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga, Portugal, Sep. 11, 2015.
2. Kido Ayae, “How inhibitor and/or promoter sign works not to do male cosmetic behavior in Japanese female,” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga, Portugal, Sep. 9, 2015.
3. Kido Ayae, “’Kawaii’ in modern Japanese society,” CHI2015, Seoul, Republic of Korea, Apr. 19, 2015.

・国内での発表

1. 木戸彩恵・荒川歩・鈴木公啓・矢澤美香子, 「発達における着衣の変遷とその変容」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知県名古屋市・名古屋大学, 2015年9月24日
2. 木戸彩恵・阿部恒之・黒須正明・サトウタツヤ, 「衣食美心理学の可能性」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知県名古屋市・名古屋大学, 2015年9月23日
3. 木戸彩恵, 「化粧を媒介とした青年期の発達」, 日本教育心理学会, 第57回総会, 新潟県新潟市・新潟大学, 2015年8月27日

・その他

1. 木戸彩恵, 「装身百様」, ライスボールセミナー特別企画『ブースセッション～研究者を身近に感じてみよう～』, 立命館大学, 2015年7月14日
2. 木戸彩恵, 「化粧を語る・化粧で語る」, ライスボールセミナー, 立命館大学, 2015年

② 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第2グループ	裁判員裁判の法心理
メンバー (所属)	グループ(チーム)リーダー: 稲葉光行(政策科学部) チームリーダー: 浜田寿美男(衣笠総合研究機構) チームリーダー: 淵野貴生(法務研究科) 拠点研究員: 吉井匡(香川大学) 拠点研究員: 堀田秀吾(明治大学) 拠点研究員: 破田野智己(文学部) 拠点研究員: 若林宏輔(文学部) 拠点研究員: 山田早紀(R-GIRO/補助研究員) 専門研究員: 斎藤進也(R-GIRO/専門研究員) 大学院生: 中田友貴(文学研究科) 大学院生: 田一葦(文学研究科)
研究実施場所	創思館413号, アート・リサーチセンタープロジェクト室5等
内容	<p><u>①研究の進捗状況</u></p> <p>本グループの目的は、市民が量刑判断まで行うという重い責任を負う日本の裁判員裁判(Japanese Lay Judge System)において、判断の基礎となる情報の分かりやすさを阻害する要因や、人間一般が陥りやすい多様なバイアスについて検討し、裁判員による公平な判断を支援するシステムを開発することである。</p> <p>これまでと同様に今期においても、稲葉リーダーをはじめとする上記メンバーが、複数の弁護団からの依頼に基づき、刑事事件の心理鑑定およびコンピュータを用いた供述調書の分析などに関わった。これらの結果は、裁判員裁判における鑑定書・意見書の形で裁判所に提出された。</p> <p><u>②拠点形成に向けた取組み</u></p> <p>一般市民が、限られた時間の中で量刑まで含めて公平・公正な司法判断を行うためには、供述調書、証言、証拠などの膨大な情報の信頼性を迅速かつ適切に判断するための技術や方法論が提供される必要がある。そのためには、多様な分野の専門家の協働が必要である。本学ではR-GIRO第1フェーズによって、法学と心理学の融合による司法判断支援に関する研究の蓄積があった。今回新たに、情報学を専門とする稲葉光行氏がグループリーダーとなり、さらに供述調書分析において日本の第一人者である浜田寿美男氏や、犯罪報道や公判前手続きの専門家である淵野貴生氏が参加することで、市民による公平・公正な司法判断を支える技術と方法論について検討するための拠点形成に踏み出すことができた。さらに、本グループの心理鑑定や調書分析の結果が、裁判員裁判を含む複数の裁判での意見書として提出されるなど、研究成果の社会還元が始まっている。</p> <p>拠点形成にむけたこれまでの具体的な取組みとしては、次の5点が挙げられる。1) 日本全国の冤罪被害者を支援する組織として「日本版イノセンス・プロジェクト」準備室を立ち上げた。2) 供述分析による冤罪証明・情状鑑定などをテーマとして、月に一度「関西自白研究会」を開催した。3) 一部メンバーが、現在係争中の刑事・民事訴訟における</p>

心理鑑定・情状鑑定・供述調書分析を担当した。4) 大逆事件研究会と共同で、コンピュータを用いた供述調書分析に取り組んだ。5) 福島大学松川資料室寄贈された裁判資料などを手初めとして、研究者や司法実務家の利用を想定した裁判資料のアーカイブ化・デジタル化と、視覚化技術を用いた分析に着手した。

③若手研究者の育成状況

齋藤進也氏は、データ・ビジュアライゼーションの技法を独自開拓し、それを司法プロセスや組織マネジメントに活用する取り組みをおこなっている。

本期間（2015年4月～2015年9月）において、齋藤氏は（1）3次元データ視覚化システム「KACHINA CUBE」における実用化のための開発とアーカイブ設計（2）2次元データ視覚化エンジン「SALOMONIS」の人文・社会科学領域における学術的活用実践（3）質的データ視覚化ツール「NARREX」の開発という3つの取り組みに従事した。具体的には、（1）では、プログラムの実用化にむけた整備・リファクタリングを実施するとともに、アーカイブ設計として松川事件を対象とする場合のデータ構造の考察をおこなった。（2）では、従来から進めているデータセットの放射状マッピングによるデータ俯瞰支援システムの拡張に加え、本システムの実践的運用を本格的に開始した。本期間では、浮世絵やデジタルゲームのデータベースを対象に運用をおこなったが、次期間（2015年9月～2016年3月期）においては、供述に代表される司法プロセス関連データを用いた運用をおこなう予定である。そして、（3）については、視覚化にいかすべき要素収集のため、TEM（複線径路・等至性モデル）といった質的心理学の方法論のエッセンスを再検討し、視覚化技術に導入するポイントをデザインとして反映させた。プログラミング作業も順調に進んでおり、次期間（2015年9月～2016年3月期）内にバージョン1.0をリリースする予定である。

また、国内のみならず「The Japanese Association for Digital Humanities 2015」などの国際学会などで、積極的に研究活動のアプトプットを行った。

さらに、齋藤氏が立方体型の視覚化をテーマとし、研究代表者として申請した科研費（基盤研究（C））が採択されるなど、研究成果に対する対外的な評価も得られつつある。

専門研究員の業績

・国内での発表

1. 齋藤進也, 「情報視覚化プラットフォームの構築：学術的意義と創作的側面」, 2015年度第12回ライスボールセミナー, 立命館大学衣笠キャンパス, 2015年7月7日。
2. 齋藤進也, 「作品の比較を支援するための情報システム —分析視点の視覚化から—」, 第18回DH拠点セミナー, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2015年6月17日。

・国外での発表

1. Shinya Saito and Keiko Suzuki, “Development of a Data-visualization Tool for Ukiyo-e Analysis: A Case Study of Otohime,” Japanese Association for Digital Humanities Conference 2015 (JADH2015), The Japanese Association for Digital Humanities, Conference Booklet, pp. 45-46, Kyoto University, Kyoto, Sep. 3, 2015.
2. Shinya Saito, Kazufumi Fukuda, and Shuji Watanabe, “Development of Interactive Infographics for Support of Comparative Analysis of Game,” Replaying Japan 2015, Ritsumeikan University, Kyoto, May. 22, 2015.
3. Shuji Watanabe, Minato Takeda, Shinya Saito, and Seiki Okude, “’Game-Sketch’

	<p>demo The modeling of ‘Why do people play Games?’ and ‘Why do people get tired Games?’ ,” Replaying Japan 2015, Ritsumeikan University, Kyoto, May. 22, 2015.</p> <p>・外部資金獲得</p> <p>1. 競争的資金 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(C)「立方体型情報ビューアーによる視覚的データ管理手法の構築」(課題番号: 15K00442, ウェブ情報学・サービス情報学), 2015年度-2018年度, 齋藤進也(代表)</p>
--	--

③ 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第3グループ	被害者支援
メンバー (所属)	<p>グループ(チーム)リーダー: 松本克美(法務研究科)</p> <p>チームリーダー: 村本邦子(応用人間科学研究科)</p> <p>チームリーダー: 野田正人(産業社会学部)</p> <p>拠点研究員: 二宮周平(法学部)</p> <p>拠点研究員: 平野哲郎(法学部)</p> <p>拠点研究員: 吉田容子(弁護士, 法務研究科)</p> <p>拠点研究員: 佐伯昌彦(千葉大)</p> <p>拠点研究員: 安田裕子(R-GIRO 特別招聘研究教員・准教授)</p> <p>専任研究員: 金成恩(R-GIRO/専門研究員)</p> <p>大学院生: 春日秀朗(文学研究科博士後期課程)</p> <p>大学院生: 山口慶江(法科大学院)</p>
研究実施場所	朱雀4033号研究室, 朱雀1Fラウンジ, 朱雀1Fリーガル・クリニック室等
内容	<p><u>①研究の進捗状況</u></p> <p>本グループは, 性暴力やDV, 児童虐待等々の様々な被害者に対する多角的な支援のため, 「研究における被害者救済の法理論の開発とリーガル・クリニックなどの大学の教育実践との連携・発展」と「法実務の専門家と連携できる心理・福祉従事者の育成」を目標としており, 最終的に「被害者のライフ支援の立命館モデルの構築」を目標としている。</p> <p>2015年度前期は, 被害特性に則した取り組みの一つである各種訴訟における被害者の民事損害賠償請求権の時効・除斥期間問題について研究を行った。</p> <p>まず, 2015年6月20日に日本ドイツ学会で松本克美が「児童期の性的虐待被害と〈時の壁〉 - ドイツにおける相次ぐ法改正と日本への示唆」について発表した。また, 釧路PTSD等事件控訴審判決に対する児童期の性的虐待被害に起因するPTSD等の発症に対する損害賠償請求権の時効・除斥期間の問題につき, 論文を発表しており, 韓国・圓光大学で開催された国際学術大会でPTSDと損害賠償・時効問題について発表を行った。</p> <p>また, グループリーダー松本克美は, 不法行為を理由とする民事損害賠償請求権における損害論を法心理学の観点から再構築することによって被害回復支援のための司法臨床的理論枠組みを開発することを目標に, 研究に取り組んでいる。その成果として, 2015年7月立命館大学人間科学研究所萌芽のプロジェクト研究に採択され, 法心理学の見地から損害論・時効論を再構築するための基礎的研究を, 韓国との比較研究を含め, 調査及び研究に取り組んでいる。</p> <p><u>②拠点形成に向けた取り組み状況</u></p>

拠点形成に向けた取組みとして、被害者支援グループ・グループリーダーの松本克美を中心に、セミナーとをコーディネートし、開催した。第36回「法心理・司法臨床セミナー」（2011年7月20日）で、八鹿病院事件訴訟の原告側弁護士である岩城譲に「加害公務員個人の損害賠償責任追及の法心理－八鹿病院医師過労パワハラ自殺事件遺族の訴え」と題する講演をしていただき、大変参考になった。

また、2014年度後期に訪問し、ヒアリング調査を行った韓国性暴力相談所の所長を招聘し、児童期性虐待に関する韓国の法制度・法システムの改革に性暴力相談所が、運動、研究面でどのような寄与をしてきたかについてジェンダー法学会で講演をいただく予定である。韓国性暴力相談所は、梨花女子大学でジェンダー学を学んだ院生たちを中心に1990年代に作った組織で、「相談所」やシェルター活動などの他に、政府機関から様々な研究や調査も委託されて行っている民間機関で、韓国の性暴力立法にも大きな影響を与えたNGOである。

③若手研究者の育成状況

本グループには、若手研究者として金成恩（専門研究員）が参加している。今期は、子をめぐる紛争（児童期性的虐待被害、離婚に伴う子の奪い合い、第三者の関わる生殖補助医療によって生まれた子の法的地位の問題）の解決制度について、外国との比較研究を含め、調査及び研究を行っている。

第一に、児童期の性的虐待被害の支援については、性的虐待被害に遭った子どもへの司法手続（捜査・裁判）においてトラウマや2次被害の防止のために、陳述録画や心理治療を行っている韓国の取組みを調査し、日本において大いに参考となる点としてどのようなものがあるのかについて研究しており、10月の日本法心理学会で現実性のある提案をする予定である。

第二に、離婚に伴う子の奪い合いについては、子の意思尊重と当事者支援の視点から、両親のコンセンサスによる解決ができる制度について研究を行ってきた。結果としては、10月東アジア法心理シンポジウムで発表する予定である。

第三に、第三者の関わる生殖補助医療によって生まれた子の法的地位については、5月韓国・圓光大学で開催された国際学術大会で発表を行った。

専門研究員の業績

・論文（査読あり）

1. 金成恩, 「ジェンダーの視点における子の氏・本の変更許可の判断基準」, 『法学研究』, 韓国法学会, 第58輯, pp. 301-319 (2015)
2. 金成恩, 「日本における番号法の施行をめぐる個人情報保護」, 『被害者学研究』, 韓国被害者学会, 第23巻1号, pp. 61-81 (2015)

・国内での発表

1. 金成恩, 「DV・高葛藤の事案と面会交流の取組み」, ライスボールセミナー, 立命館大学, 2015年5月19日

・海外での発表

1. 金成恩, 「第三者の関わる生殖補助医療における問題と今後の課題」, 韓中日生命科学と法シンポジウム, 韓国・圓光大学・生命・医学と法研究所, 益山市, 2015年5月12日

	<p>・外部資金獲得</p> <p>1. 競争的資金 科学研究費補助金・基盤研究 B (H26～H28) (日本学術振興会)「家事事件当事者の合意による解決と家事調停・メディエーション機能の検証」, <u>二宮周平</u>(代表), <u>金成恩</u>(分担)</p>
--	---

④ 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第 4 グループ	司法臨床と治療的司法
メンバー (所属)	<p>グループ (チーム) リーダー: 中村正 (産業社会学部)</p> <p>チームリーダー: 廣井亮一 (文学部)</p> <p>チームリーダー: 森久智江 (法学部)</p> <p>拠点研究員: 指宿信 (成城大)</p> <p>拠点研究員: 脇中洋 (大谷大)</p> <p>拠点研究員: 山崎優子 (R-GIRO 客員研究員)</p> <p>研究生 : 川本静香 (文学研究科博士課程)</p>
研究実施場所	
内 容	<p><u>①研究の進捗状況</u></p> <p>「加害行為」「問題行動」「逸脱行動」に焦点を当て、加害者臨床を可能にする問題解決型司法やその問題の解決を担う心理、教育、福祉等の具体的な内容の開発、司法との連携の仕方や手続き法等についての新しい考え方の開発と研究について、国際比較も交えながら、その上で成果の社会実証、社会実装をしながら課題に取り組むという目標が旺盛な研究成果に示されるように着実に進められている。これまでと同様に、加害と被害が錯綜することに根ざして具体的な事例を扱う実践的研究をすすめている。司法臨床についての加害者臨床の理論や更生保護の理論と現実分析、それを司法過程に内在させていく研究、被害者対策とのすりあわせについての研究として進んでいる。</p> <p><u>②拠点形成に向けた取組み状況</u></p> <p>脱暴力にむけた「治療」と修復をめざす司法臨床、触法障がい者の社会復帰支援、可視化を中心とした捜査のあり方、子どもの発達の視点にたった司法面接、開かれた司法にするための心理的課題、社会臨床的課題としてのうつや自殺防止についての研究等、焦眉の課題となっている司法臨床ならびに法と心理の研究について、司法関係組織と連携した研究を展開している。いずれも社会的要請の強い課題群であり、大学のもつ研究機能をとおして貢献できている。さらに国際学会でも発表し、世界水準の理論、政策・制度や臨床実践と交流しながら拠点形成にむけての着実な取り組みを重ねている。</p> <p><u>① 若手研究者の育成状況</u></p> <p>川本静香氏は、現在、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センターに勤務し、臨床研究を行うと同時に、博士論文の執筆にあたっている。山崎優子氏は、H24、H25 に立命館大学で実施した日本学術振興会主催のひらめき☆ときめきサイエンスを北海道大学で開催し、科学研究費を得て行った研究成果の社会還元を行った。学会発表、論文公表はもとより、研究を社会につなぐことにも取り組んでいる。法と心理、司法臨床の諸課題にたいして社会的インパクトの強い、アクションリサーチ風の研究とも</p>

	<p>いえ、若手研究者の幅広い能力を涵養できる拠点として機能している。</p> <p><u>若手研究者の業績</u></p> <p>【学会発表】（国内での発表）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. <u>山崎優子</u>・石崎千景, 「法律や裁判に対して市民が認識する「違和感」, 日本心理学会第79回大会, 名古屋大学, 2015年9月24日 2. <u>川本静香</u>, 「うつ病に対する認識についての探索的検討—自らをうつ病と疑うのはどのような状態か?—, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知県・名古屋国際会議場, 2015年9月23日 3. <u>川本静香</u>・川島大輔・畑中美穂・原田知佳・森岡さやか・川野健治, 「自殺予防教育プログラム GRIP の開発と展開(2)」, 日本自殺予防学会, 第39回日本自殺予防学会総会, 青森県・青森県立保健大学, 2015年9月12日 <p>【外部資金獲得（競争的研究費, 共同研究, 受託研究, 奨学寄附金等）】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 科学研究費補助金 新学術領域研究「法と人間科学」公募研究（H26～H27）（日本学術振興会）「法律に対する市民の違和感を規定する要因の心理学的検討」, <u>山崎優子</u>（代表）, 計270万円 2. 科学研究費補助金 基盤C（一般）（H26～H28）（日本学術振興会）「裁判員裁判における量刑の格差是正に関する実証的研究」, <u>山崎優子</u>（代表）, 計455万円 3. 日本学術振興会 ひらめき☆ときめきサイエンス「模擬裁判に参加して被告人に対する判決を考えてみましょう」（H27）, <u>山崎優子</u>（代表）, 計36万円
--	--

⑤ 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第5グループ	視知覚に関する心理学的鑑定の技術と法理
メンバー (所属)	<p>グループ（チーム）リーダー：篠田博之（情報理工学部）</p> <p>チームリーダー：浅田和茂（法務研究科）</p> <p>拠点研究員：瀬谷安弘（情報理工学部）</p> <p>拠点研究員：松倉治代（大阪市立大）</p> <p>拠点研究員：上村晃弘（客員研究員）</p> <p>専任研究員：徳永留美（R-GIRO/専門研究員）</p>
研究実施場所	情報理工学部・ヒューマンビジョン研究室, 創思館実験室3, 視知覚鑑定実験室
内容	<p>① <u>研究の進捗状況</u></p> <p>今期は2014年度後期に実施した判例調査を元に、「見た」の修飾語に着目し、心理物理実験と言葉の印象についての調査を実施した。事件の捜査や裁判において、目撃証言は重要な証拠となる。目撃者は「見た」のかどうかを問われるのに対し、「はっきり見た」や「ちらっと見た」という表現を用いる。なぜ「見た」行為の証言に対して、修飾語が必要なのだろうか。実際の裁判において「見た」か否かを判断する裁判員は、状況証拠と「見た」という言葉から判断する。従って、「見た」という証言ではなく、修飾語がある「見た」という証言の修飾語には何らかの意味があると推測できる。判例調査によると、目撃証言では時間の間隔が短い場合に使用される修飾語である「ぱっと」、「ちらっと」、「一瞬」、「一目」が多く使用されている事が分かった。そこで、それらの記述がある30の判例を選択し、証言の信用性の有無の割合を調べた。例えば、住居侵入・強盗殺人被告事件（最三小判S57・</p>

3・16 集刊第 226 号 1 頁) では、目撃者の「ちらっと見た」との証言について、検察側は「ちらっと見たに過ぎないのであって、気付かなかった」と主張したが、裁判所は「見ていない」と相反する解釈がなされたケースがある。短い時間を表現していると推測できるこれらの修飾語が意味することは何なのか、知覚時間や言葉の持つ印象について評価実験により検討した。

知覚時間測定実験では、モニタ上に一つの修飾語が提示され、観測者はその言葉に合うようにモニタに呈示させる画像の呈示開始と終了を設定した。この際の画像が呈示されている時間を、その修飾語の知覚時間とした。15 人の観測者の結果から、「一瞬」が 0.56 秒の知覚時間となり一番短かった。「ぱっと」や「ちらっと」は物理的には 1 秒以上だが、物理的な 1 秒に対して観測者の知覚時間は 1.3 秒であった事をふまえると、それらに対する知覚時間は 1 秒以内であった。「しっかり」や「はっきり」は画像の情報量と関係していると考えられ、「はっきり見る」において 7.2 秒で、「しっかり見る」で 11.3 秒であった。これらの結果は、修飾語が使われる「見た」という目撃証言に対して、使用された修飾語により知覚時間が異なり、それに伴い人が見ることができる事象の情報量を推測できると考えられる。アンケート方式による信用性調査において、「一瞬」が最も信用が減少する言葉であり、「しっかり」が最も信用が増す言葉であると判断された。また、各被験者の主観的な「一瞬」の時間間隔は 0.1 秒から 0.8 秒とこれらの結果は、特定の修飾語が使われる「見た」に対する信用性を判断する際、時間的な状況と証言の情報量などを分析するための指標になると考えられる。今後はこれらの結果をまとめて投稿論文の作成に取り組む予定である。

② 拠点形成に向けた取組み状況

本研究のテーマとして 1) 目撃証言 (犯人識別供述) 鑑定の証拠法上の位置づけや法鑑定の理論の展開, 2) 目撃証言を鑑定する際に基本となる光学的な基礎研究や、視環境悪条件下の目撃に関する視覚科学・応用光学的研究, 3) 目撃証言 (犯人識別供述) の供述を行うものが錯誤を犯す可能性についての心理学的研究の三つがある。

拠点形成の取組みとして、視知覚実験の結果の解析に取り組んだ。証言の際に目撃者や被告が使用する「見る」を修飾する言葉に着目し、「ぱっと」や「一瞬」という言葉が示す知覚時間についての心理物理実験や、それらの言葉に対する印象についてのアンケート調査を実施した。

③ 若手研究者の育成状況

本グループには、専任研究員 1 名 (徳永留美氏) が参加している。今期は、顔色に関する目撃証言の視覚実験の実験結果、影の濃さの違いと空間の明るさ感の関係について、照明光の色の違いによる白色物体の色知覚の変化についての研究報告を実施した。さらに、「ぱっとみた」や「一瞬みた」という目撃証言に関する「見た」の修飾語についての知覚時間実験とアンケート調査を実施した。これらの結果から、判例調査を基にした証言の言葉とそれが示す知覚との整合性についてのまとめに取り組んでいる。

専任研究員の業績

・ 論文

1. Alexander D. Logvinenko, Brian Funt, Hamidreza Mirzaei, and Rumi

Tokunaga, “Rethinking Colour Constancy,” PLoS ONE 10(9): e0135029 (2015)

・国際学会発表

1. Rumi Tokunaga, Hiroataka Urabe, Hiroyuki Shinoda, “The perception of shadow and the apparent brightness in the space,” The 38th European Conference on Visual Perception, UK・Liverpool University, Aug. 25, 2015.
2. Ichiro Kuriki, Yumiko Muto, Kazuho Fukuda, Rumi Tokunaga, Delwin Lindsey, Angela Brown, Keiji Uchikawa, and Satoshi Shioiri, “Categorical color clusters of Japanese color lexicon,” International Color Vision Society, Tohoku University, Jul. 6, 2015.

・国内学会発表

1. 徳永留美, 田口 肇, 岡崎友紀, 前崎信也, 篠田博之, 「白磁の照明光色の違いによる色知覚と印象評価」, 日本色彩学会, 山形・山形大学米沢キャンパス, 2015年9月27日

・研究会での発表

1. 徳永留美, 篠田博之, 「人の顔色のバリエーションと応答の恒常性について」, コスメティクスと肌・顔研究会 第2回研究発表会, 東京・産業技術総合研究所臨海副都心センター, 2015年4月23日
2. 徳永留美, 「目撃証言における顔の色名について～誰もが同じ色名で証言するのか～」, ライスボールセミナー, 立命館大学, 2015年4月21日

・外部資金獲得

1. 競争的資金 科学研究費補助金・若手研究 (B) (H25-H27) (日本学術振興会) 「空間の明るさと影の知覚に基づいた明度知覚モデルの構築」, 徳永留美, 計 416 万円

(4) 拠点形成プロジェクトでの研究成果発表

運営委員会以外には開示しないことを希望する

① 雑誌論文 (査読あり)

■グループ1

1. 木戸彩恵・荒川歩・鈴木公啓・矢澤美香子, 「幼児期から青年期にかけて衣服を選び, 着る行為の変容—女子大学生を対象としたインタビュー調査から—」, 『立命館人間科学研究』, 立命館大学人間科学研究所, 32, pp. 85-104. (2015)
2. サトウタツヤ, 「文化心理学から見た食の表現の視点から食文化とその研究について考える」, 『社会システム研究』, 立命館大学社会システム研究所, 特集号, pp. 197-209. (2015)
3. サトウタツヤ, 「TEA (複線径路等至性アプローチ)」, 『コミュニティ心理学研究』, 日本コミュニティ心理学会, 19 巻 1 号, pp. 52-61. (2015)
4. 篠木涼, 「大衆化する心理学における「セルフコントロール」の登場—ジョセフ・ジャストロウを中心に—」, 『立命館人間科学研究』, 立命館大学人間科学研究所, 32, pp. 35-53. (2015)

■グループ3

1. 二宮周平, 「家族法における憲法的価値の実現～家族法改正と司法判断(1)」, 戸籍時報 726 号, pp. 2-15 (2015年5月)
2. 二宮周平, 「家族法における憲法的価値の実現～家族法改正と司法判断(2)」, 戸籍時報 728 号, pp. 25-37 (2015年7月)
3. 二宮周平, 「面会交流の意義と支援の新たな取組み」, 戸籍時報 729 号, pp. 2-9 (2015年8月)

4. 金成恩, 「ジェンダーの視点における子の氏・本の変更許可の判断基準」, 『法学研究』, 韓国法学会, 58 輯, pp. 301-319 (2015 年 6 月)
5. 金成恩, 「日本における番号法の施行をめぐる個人情報保護」, 『被害者学研究』, 韓国被害者学会, 23 巻 1 号, pp. 61-81 (2015 年 4 月)

■グループ 4

1. 中村正, 「DV のある家族への支援とは」, 『保健の科学』, 杏林書院, 第 57 巻第 6 号, pp. 361-387, (2015)
2. Ibusuki, Makoto, "Review: Kent Anderson, Harald Baum and Yasuhiro Okuda (eds.) Glossary of Japanese Criminal Procedure," Zeitschrift für Japanisches Recht (Journal of Japanese Law), vol. 20 p. 303-306. (2015)

■グループ 5

1. Asada, K., "Embryonenschutz im japanischen Recht im Vergleich zum deutschen Recht," W. Perron u. a. (Hrsg.), Scripta amicitiae, Freundschaftsabendgabe für Albin Eser zum 80. Geburtstag, S. 13-24 (2015)
2. 浅田和茂, 「税理士法 59 条 1 項 3 号 (同法 52 条) について」 税経新報 630 号 4-14 頁 (2015)
3. Yasuhiro Seya, Megumi Yamaguchi, and Hiroyuki Shinoda, "Single stimulus color can modulate vection", "Frontiers in Psychology," Vol. 6 (406), 1-12, (2015).
4. Yasuhiro Seya, and Shuji Mori, "Tradeoff between manual response speed and pursuit accuracy revealed by a deadline procedure," "Experimental Brain Research", Vol. 233, No. 6, 1845-1854, (2015).
5. Alexander D. Logvinenko, Brian Funt, Hamidreza Mirzaei, and Rumi Tokunaga, "Rethinking Colour Constancy," PLoS ONE 10(9): e0135029(2015)

② 雑誌論文 (査読なし)

■グループ 2

1. 浜田寿美男, 「「事件」と出会った心理学者 第 25 回 自白しながら犯行の重要部分を語れない」, 『究』, ミネルヴァ書房, 49 号, pp. 24-27, (2015)
2. 浜田寿美男, 「「事件」と出会った心理学者 第 26 回 被疑者の「語れなさ自白」に目をつむる取調官」, 『究』, ミネルヴァ書房, 50 号, pp. 24-27, (2015)
3. 浜田寿美男, 「「事件」と出会った心理学者 第 27 回 平沢貞通事件の謎」, 『究』, ミネルヴァ書房, 51 号, pp. 28-31, (2015)
4. 浜田寿美男, 「「事件」と出会った心理学者 第 28 回 自白的関係から脱け出す」, 『究』, ミネルヴァ書房, 52 号, pp. 28-31, (2015)
5. 浜田寿美男, 「「事件」と出会った心理学者 第 29 回 寡黙な物証と饒舌な自白」, 『究』, ミネルヴァ書房, 53 号, pp. 28-1, (2015)
6. 浜田寿美男, 「「事件」と出会った心理学者 第 30 回 真犯人の虚偽自白」, 『究』, ミネルヴァ書房, 54 号, pp. 28-31, (2015)
7. 涸野貴生, 「黙秘権保障と自白法則」, 川崎英明=白取祐司編『刑事訴訟法理論の探究』(日本評論社), pp. 184-200, (2015)
8. 涸野貴生, 「刑事訴訟法分野における最高裁判官の属性と判決行動」, 市川正人=大久保史郎=斎藤浩=渡辺千原『日本の最高裁判所一判決と人・制度の考察』(日本評論社), pp. 131-145 (2015)
9. 涸野貴生, 「『調査官解説』論 刑事訴訟法」, 市川正人=大久保史郎=斎藤浩=渡辺千原『日本の最高裁

■グループ 3

1. 松本克美, 「児童期の性的虐待被害に起因する PTSD 等の発症に対する損害賠償請求権の時効・除斥期間—釧路 PTSD 等事件控訴審判決」, 法律時報 87 卷 11 号, pp. 165-168 (2015 年 9 月)
2. 松本克美, 「PTSD と損害賠償・時効問題」, 医生命科学 13 卷, pp. 131-144 (2015 年 6 月)
3. 村本邦子・上山真知子・吉浜美恵子・団士郎・久田満, 「東日本大震災後のコミュニティ・エンパワメント」, コミュニティ心理学研究 19 卷 1 号, 日本コミュニティ心理学会, pp. 1-36 (2015 年 9 月)
4. 村本邦子, 「周辺からの記憶 7: 2012 年度京都, むつ」, 対人援助学マガジン 6 卷 1 号, pp. 155-165 (2015 年 6 月)
5. 村本邦子, 「抵抗とレジリエンス~3.11 後を生きるために」, 女性ライフサイクル研究 24 号, pp. 4-11 (2015 年 5 月)
6. 村本邦子, 「周辺からの記憶 6: 2012 年度のプロジェクトに向けて」, 対人援助学マガジン 5 卷 4 号, pp. 146-151 (2015 年)
7. 二宮周平, 「家族~多様性の承認と家族観の転換」, 法の科学 46 号, 46~55 頁 (2015 年)
8. 安田裕子, 「コミュニティ心理学における TEM/TEA 研究の可能性」, 『コミュニティ心理学研究』, 日本コミュニティ心理学会, 第 19 卷 1 号, pp. 62-76, (2015 年)

■グループ 4

1. 中村正, 「臨床社会学の方法 (9) 日常生活」, 『対人援助学マガジン』, 対人援助学会, 第 6 卷第 1 号, pp. 18-26, (2015)
2. 中村正, 「臨床社会学の方法(10)サイレンシング (沈黙化作用)」, 『対人援助学マガジン』, 対人援助学会, 第 6 卷第 2 号, pp. 19-21, (2015)
3. 中村正, 「DV 加害者の脱暴力への臨床実践」, 『週刊日本医事新報』, 医事新報社, 第 4771 号, p. 51, (2015)
4. 脇中洋, 「特集 うそを発達的に理解する」, 『発達教育』, 発達協会, 2015 年 7 月号, pp. 4-11, (2015)
5. 脇中洋, 「大学で味わってほしいこと」, 『花園大学人権教育研究センター報』, 花園大学人権教育研究センター, 27 号, pp. 54-56, (2015)
6. 指宿信, 「GPS 利用捜査とその法的性質」, 法律時報, 日本評論社, 87 卷 10 号, pp. 58-64, (2015)
7. 指宿信・暮井真絵子, (翻訳) ブルース・ウィニック 「刑事被告人の訴訟能力」, 成城法学, 成城大学, 84 号, pp. 99-162, (2015)

■グループ 5

1. 浅田和茂, (書評) 「特集『裁判員裁判における量刑と弁護活動』」法律時報 87 卷 5 号, 128-131 (2015)

③ 図書

■グループ 1

1. 荒川歩, 日本パーソナリティ心理学会 20 年史編纂委員会編『日本パーソナリティ心理学会 20 年史』, 福村出版, pp. 178-179. (2015)
2. 木戸彩恵, 「自由度の高い学会誌と学会に育てられて」, 日本パーソナリティ心理学会 20 年史編纂委員会 (編) 『日本パーソナリティ心理学会 20 年史』, 福村出版, pp. 190-191, (2015)
3. 木戸彩恵, 「グルーミング」, 高瀬賢吉・柳井修一・山口哲生 (監訳), 『ラットの行動解析ハンドブック』, 西村書店, (2015)
4. Sato, T., Kasuga, H., Kanzaki, M., and Wagoner, B., "Body, Mind, and Movement: Some Proposals for

■グループ3

1. 村本邦子・中村正・荒木穂積, 『臨地の対人援助学～東日本大震災と復興の物語』, 晃洋書房 (2015年8月)
2. 松本克美, 「財産の安全配慮義務」, 滝沢昌彦他編『民事責任の法理』, (円谷峻先生古稀祝賀論文集), 成文堂, pp. 295-316 (2015年5月)
3. 二宮周平, 「家族法～同性婚への道のりと課題」三成美保編『同性愛をめぐる歴史と法』(明石書店), 122～147頁, (2015年)

■グループ4

1. 中村正・村本邦子, 荒木穂積編, 『臨地の対人援助学』, 晃洋書房, pp. 1-25, pp. 191-198, (2015)
2. 中村正, 日本弁護士連合会編, 『現代法律実務の諸問題』, 第一法規, pp. 513-548, (2015)

■グループ5

1. 浅田和茂, 久岡康成, 井戸田侃編, 『佐伯千仞著作選集第二巻 違法性と犯罪類型・共犯論』, 信山社. (2015)
2. 浅田和茂, 久岡康成, 井戸田侃編, 『佐伯千仞著作選集第三巻 責任の理論』, 信山社. (2015)
3. 川端博, 浅田和茂, 山口厚, 井田良共編, 『刑法理論の探求8』, 成文堂. (2015)

(5) 学会発表 運営委員会以外には開示しないことを希望する

① 海外での発表

■グループ間

1. Banda Kiyomi, Takahashi Namiko, Sato Tatsuya, and Yasuda Yuko, “Career Identity Work-Visualization of the process of students’ career development in school-to-work transition-,” IAEVG International Conference Tsukuba, Tsukuba, Japan, Sep. 21, 2015.
2. Sato, T., Mattos, de E., Salgado, J., Kido, A., Tian, Y., and Yasuda, Y., “Potentials of trajectory equifinality approach in Developmental Psychology,” European Conference on Developmental Psychology, 17th European Conference on Developmental Psychology, Braga, Portugal・University of Minho, Sep. 9, 2015.
3. Sato Tatsuya, Mattos de Elisa, Salgado Joao, Kido Aya, Tian Yiwei, and Yasuda Yuko, ” Potentials of trajectory equifinality approach in Developmental Psychology, ” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga・Portugal, Sep. 9, 2015.
4. Nakata, Yuki, and Sato Tatsuya, ” The effect of presentation of video-taped investigation on jury decision making,” European Association of Psychology and Law + WORLD Conference 2015, Nurnberg, Germany, Aug. 15, 2015.

■グループ1

1. Kanzaki Mami and Sato Tatsuya, “Understanding the development of students who had experienced school nonattendance, ” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga, Portugal, Sep. 11, 2015.

2. Kido Ayae, “ ‘ Kawaii ’ in modern Japanese society, ” CHI2015, Seoul, Republic of Korea, Apr. 19, 2015.
3. Kido Ayae, “An examination of socio-cultural development and cosmetic behaviour/consciousness: Cosmetic assumptions among different life-stages and cosmetic behavior/consciousness in elderly women,” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga, Portugal, Sep. 11, 2015.
4. Kido Ayae, “How inhibitor and/or promoter sign works not to do male cosmetic behavior in Japanese female,” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga, Portugal, Sep. 9, 2015.
5. Simizu Daichi and Sato Tatsuya, “The learning process of university students both in lectures and in extracurricular activities : From the interview with senior students,” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga, Portugal, Sep. 11, 2015.
6. Tian Yiwei, and Sato Tatsuya, “Transformation by Using Trajectory Equifinality Approach,” The 8th International Conference on the Dialogical Self, Braga, Portugal, Sep. 11, 2015.
7. Kosaka Yuki, and Sato Tatsuya, “ Proposal of discussion pattern in Japanese lay judge system by qualitative analysis method, ” European Association of Psychology and Law + WORLD Conference 2015, Nurnberg, Germany, Aug. 15, 2015.
8. Saito Ayako, & Sato Tatsuya, “ Efforts to promote and maintain employment of probationers/parolees by cooperative employers,” European Association of Psychology and Law + WORLD Conference 2015, Nurnberg, Germany, Aug. 15, 2015.

■グループ 2

1. Shinya Saito, and Keiko Suzuki, “Development of a Data-visualization Tool for Ukiyo-e Analysis: A Case Study of Otohime,” Japanese Association for Digital Humanities Conference 2105 (JADH2015), The Japanese Association for Digital Humanities, Conference Booklet pp. 45-46, Kyoto University, Kyoto, Sep. 3, 2015.
2. Wakabayashi, K., “Brief History of Japanese Law and Psychology for the Criminal Investigation, Implications of Social Science for Criminal Investigation in Japan,” International Workshop on Forensic Evidence and Social Science, William S. Richardson School of Law, University of Hawaii, Aug. 28, 2015.
3. 稲葉光行, 「日本版イノセンス・プロジェクトの設立とその展望」, 台湾冤獄平反協會フォーラム, 台湾, 台北市, 国立台湾大学, 2015年8月22日
4. Wakabayashi, K., “What is the Best Deliberation Structure for Citizen Participation in Criminal Justice? Approach from the View of Social Psychology,” The 4th East Asian Law and Society Conference (Session) , Waseda University, Tokyo, Japan, Aug. 5, 2015.
5. Shinya Saito, Kazufumi Fukuda, and Shuji Watanabe, “Development of Interactive Infographics for Support of Comparative Analysis of Game,” Replaying Japan 2015, Ritsumeikan University, Kyoto, May 22, 2015.
6. Shuji Watanabe, Minato Takeda, Shinya Saito, and Seiki Okude, “ ‘ Game-Sketch ’ demo The modeling of ‘Why do people play Games?’ and ‘Why do people get tired Games?’ , ” Replaying Japan 2015, Ritsumeikan University, Kyoto, May 22, 2015.

■グループ 3

1. Banda, K. , Takahashi, N. , Sato, T. , and Yasuda, Y., “Career Identity Work: Visualization

of the process of students' career development in school-to-work transition," IAEVG, IAEVG International Conference, Tsukuba International Congress Center, Sep. 21, 2015.

2. 松本克美, 「PTSD と損害賠償・時効問題」, 韓中日生命科学と法シンポジウム, 韓国・圓光大学・生命・医学と法研究所, 益山市, 2015年5月12日
3. 金成恩, 「第3者の関わる生殖補助医療における問題と今後の課題」, 韓中日生命科学と法シンポジウム, 韓国・圓光大学・生命・医学と法研究所, 益山市, 2015年5月12日

■グループ4

1. Tadashi Nakamura, "Recent Movement of therapeutic justice in Japan," 4th International AOTEARA Conference on Therapeutic Jurisprudence (第4回国際治療的正義学会), Oakland, New Zealand, University of Oakland 学, Sep. 3, 2015.
2. Makoto Ibusuki, Organizer, "JAPANESE STYLE OF THERAPEUTIC JURISPRUDENCE," XXXIVth International Congress on Law and Mental Health, Vienna, Austria, Jul. 15, 2015.
3. Makoto IBUSUKI, Speaker, "Recent Movement of Therapeutic Approach in the Japanese Criminal Justice," XXXIVth International Congress on Law and Mental Health, Vienna, Austria, Jul. 15, 2015.
4. Tadashi Nakamura, "What we need to know about offender therapy : From the context of family centered society," XXXIVth International Congress on Law and Mental Health, Vienna, Austria, Jul. 12, 2015.
5. Makoto Ibusuki, "Comparative study of interview recording law: A concept for analysis of legal framework," 8th Annual Conference international Investigative Interviewing Research Group, Melbourne, Australia, Jun. 26, 2015.

■グループ5

1. Yasuhiro Seya, Hiroyuki Shinoda, and Yoshiya Nakaura, "Up-down asymmetry in vertical vection", European Conference on Visual Perception", 38th European Conference on Visual Perception, Liverpool, U.K., University of Liverpool, Aug. 26, 2015.
2. Ryo Yamaji, Yasuhiro Seya, and Hiroyuki Shinoda, "Relationship between vection and body sway", European Conference on Visual Perception," 38th European Conference on Visual Perception, Liverpool, U.K., University of Liverpool, Aug. 26, 2015.
3. Yusuke Fujimoto, Hiroyuki Shinoda, and Yasuhiro Seya, "Degradation of display image due to glare of ambient light evaluated by visibility matching and degradation category rating," European Conference on Visual Perception, 38th European Conference on Visual Perception, Liverpool, U.K., University of Liverpool, Aug. 26, 2015.
4. Shogo Yamada, Yasuhiro Seya, and Hiroyuki Shinoda, "Brightness perception for a room with a scenic view through the window," European Conference on Visual Perception, 38th European Conference on Visual Perception, Liverpool, U.K., University of Liverpool, Aug. 25, 2015.
5. Naoki Kurita, Hiroyuki Shinoda, and Yasuhiro Seya, "Color management system for identical color appearance across different illuminations," European Conference on Visual Perception, 38th European Conference on Visual Perception, Liverpool, U.K., University of Liverpool, Aug. 25, 2015.
6. Rumi Tokunaga, Hiroyuki Shinoda, and Hiroyuki Shinoda, "The perception of shadow and the apparent

brightness in the space” , The 38th European Conference on Visual Perception, Liverpool, U.K., University of Liverpool, Aug. 25, 2015.

7. Yasuhiro Seya, Hiroyuki Shinoda, and Yoshiya Nakaura, ” Up-down asymmetry in visually induced self-motion perception (vection),” European Conference on Eye Movements, 18th European Conference on Eye Movements, Vienna, Austria, University of Vienna, Aug. 20, 2015.
8. Ryo Yamaji, Yasuhiro Seya, and Hiroyuki Shinoda, ” Relationship between vection and visually evoked postural responses,” Asia-Pacific Conference on Vision, 11th Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore, Nanyang Technological University, Jul. 12, 2015.
9. Yasuhiro Seya, and Hiroyuki Shinoda, ” Relationships between scene perception and visual search performance,” Asia-Pacific Conference on Vision, 11th Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore • Nanyang Technological University, Jul. 11, 2015.
10. Shogo Yamada, Yasuhiro Seya, and Hiroyuki Shinoda, ” Scenic views through a window affect the perception of space brightness of a room,” Asia-Pacific Conference on Vision, 11th Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore, Nanyang Technological University, Jul. 10, 2015.
11. Yusuke Fujimoto, Hiroyuki Shinoda, and Yasuhiro Seya, ” Degradation of display image due to glare of ambient light evaluated by using a visibility matching technique and analysis of their spatial frequency characteristics,” Asia-Pacific Conference on Vision, 11th Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore. Nanyang Technological University, Jul. 10, 2015.
12. Kohei Oku, Hiroyuki Shinoda, and Yasuhiro Seya, ” Images on a transparent display with a uniform gray background evaluated by visibility matching and degradation category rating,” Asia-Pacific Conference on Vision, 11th Asia-Pacific Conference on Vision, Singapore, Nanyang Technological University, Jul. 10, 2015.
13. Ichiro Kuriki, Yumiko Muto, Kazuho Fukuda, Rumi Tokunaga, Delwin Lindsey, Angela Brown, Keiji Uchikawa, and Satoshi Shioiri, ”Categorical color clusters of Japanese color lexicon,” International Color Vision Society, Tohoku University, Jul. 6, 2015.
14. Shogo Yamada, Ryosuke Tanaka, Hiroyuki Shinoda, and Yasuhiro Seya, ”Space brightness affected by a scenic view through a window,” AIC, AIC2015 Mid-term Meeting, Tokyo, Japan, Ochanomizu sola city Conference Center, May 21, 2015.

② 国内での発表

■グループ間

1. 増井秀樹・水澤慶緒里・黒澤泰・滑田明暢・小崎恭弘・安田裕子, 「夫婦・家族関係における協同」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 名古屋・名古屋国際会議場, 2015年9月22日

■グループ1

1. サトウタツヤ, 「社会問題解決型心理学の可能性 ; 学際から学融へ」 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知県名古屋市・名古屋大学, 2015年9月24日
2. サトウタツヤ, 「心理調査士の現状と展望 ; 学際から学融へ」 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知県名古屋市・名古屋大学, 2015年9月24日
3. 木戸彩恵・荒川 歩・鈴木公啓・矢澤美香子, 「発達における着衣の変遷とその変容」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知・名古屋大学, 2015年9月24日
4. 木戸彩恵・阿部恒之・黒須正明・サトウタツヤ, 「衣食美心理学の可能性」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知・名古屋大学, 2015年9月23日

5. 松島公望・荒川歩, 「信仰の必要性認知・信仰の有無と世界観・主観的幸福感との関連」, 日本心理学会第79回大会, 愛知・名古屋国際会議場, 2015年9月23日
6. 木戸彩恵, 「化粧を媒介とした青年期の発達」, 日本教育心理学会, 第57回総会, 新潟・新潟大学, 2015年8月27日
7. Ayumu Arakawa, “Why do people consult question and answer sites about their legal problems?,” The 4th East Asian Law and Society conference, Waseda University, Tokyo, Japan, Aug. 6, 2015.
8. Masahiro Fujita, “Five-year look-back at the Japanese mixed jury system (“saiban-in” System),” The 4th East Asian Law and Society conference, Waseda University, Tokyo, Japan, Aug. 6, 2015.
9. Masahiro Fujita, “Implementing Democracy Through Japanese Lay Participation System,” The 4th East Asian Law and Society conference, Waseda University, Tokyo, Japan, Aug. 5, 2015.
10. Ryo Shinogi, 「大衆化と応用のアメリカ心理学史——19世紀末から20世紀初頭を中心に」, 日米社会学史茶話会, 第3回研究会, 東京・東京大学, 2015年8月1日
11. Ryo Shinogi 「反応とコントロールの視覚文化論—1960-70年代における行動主義心理学・行動療法におけるイメージについて」, 日本映像学会, 第41回大会, 京都・京都造形芸術大学, 2015年5月30日
12. 藤田政博・林直保子・堀田秀吾「司法制度への信頼の規定因：一般的信頼, 公正, 平等, 社会階層との関係で」, 日本法社会学会2015年学術大会, 東京・首都大学東京, 2015年5月10日

■グループ2

1. 若林宏輔・中田友貴・田一葦・高砂美樹・溝口元, 「応用心理学史としての法心理学史の再構築」, 日本心理学会第79回大会(公募シンポジウムの企画・司会), 名古屋国際会議場・名古屋大学, 2015年9月24日.
2. 稲葉光行・抱井尚子, 「混合研究法としてのグラウンデッドなテキストマイニング・アプローチ」, 国際混合研究法学会アジア地域会議/日本混合研究法学会第1回大会ワークショップ3, 立命館大学, 大阪・茨木市, 2015年9月19日
3. 刈野貴生, “New Japanese Law on the Visual Recording of Interrogation of the Custodial Suspect,” 東アジア法社会学会, 第4回東アジア法社会学会, 東京・早稲田大学, 2015年8月5日
4. Mitsuyuki INABA, Michiru TAMAI, Kenji KITAMURA, Ruck THAWONMAS, Koichi HOSOI, Akinori NAKAMURA, and Masayuki UEMURA, “Constructing Collaborative Serious Games for Cross-Cultural Learning in a 3D Metaverse,” Replaying Japan 2015, Ritsumeikan University, Kyoto, Japan, May 22, 2015.

■グループ3

1. 安田裕子・松嶋秀明・久保樹里・齋藤絢子・大倉得史・森直久, 「更生の道を時間と社会に拓くということ—加害性と被害性に留意して」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 名古屋・名古屋国際会議場, 2015年9月24日
2. 二宮周平, 「日本における同性カップルの権利保障に向けた法的課題」日本ジェンダー学会・日本∞会議法学会LGBT分科会主催・公開シンポジウム「セクシュアリティとジェンダー—性的指向の権利保障をめぐる」, 奈良女子大学, 2015年9月19日
3. 廣瀬真理子・安田裕子, 「複線径路等至性(TEM)アプローチとテキストマイニングによる混合研究法/協働により何が捉えられるか?」, 混合研究法学会, 国際混合研究法学会 アジア地域会議/第1回日本混合研究法学会, 京都・立命館大学, 2015年9月19日
4. 松本克美, 「児童期の性的虐待被害と〈時の壁〉—ドイツにおける相次ぐ法改正と日本への示唆」, 日本ドイツ学会第31回大会, 東京大学本郷キャンパス, 2015年6月20日

5. 村本邦子, 「東日本大震災後の現地支援機関との協働関係構築プロセス ～「東日本・家族応援プロジェクト」の4年を振り返って～」, 日本コミュニティ心理学会第18回大会, 2015年6月20日

■グループ4

1. 山崎優子・石崎千景, 「法律や裁判に対して市民が認識する「違和感」」, 日本心理学会第79回大会, 名古屋大学, 2015年9月24日
2. 川本静香, 「うつ病に対する認識についての探索的検討—自らをうつ病と疑うのはどのような状態か?—」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知県・名古屋国際会議場, 2015年9月23日
3. 川本静香・川島大輔・畑中美穂・原田知佳・森岡さやか・川野健治, 「自殺予防教育プログラム GRIP の開発と展開(2)」, 日本自殺予防学会, 第39回日本自殺予防学会総会, 青森県・青森県立保健大学, 2015年9月12日
4. Makoto Ibusuki, Organizer and Chair, "Looking at the Offstage of Criminal Justice Reform in Japan: Special Interview with Film Director/Former Reform Committee Member, Mr. Suo Masayuki," 4th East Asian Law and Society, Waseda University, Tokyo, Japan, Aug. 6, 2015.
5. Makoto Ibusuki, Organizer and Chair, "Legal Development in the Visual Recording of Suspect Interrogation in the East Asia: How can we ensure transparency in the interrogation room?," 4th East Asian Law and Society, Waseda University, Tokyo, Japan, Aug. 5, 2015.

■グループ5

1. 徳永留美, 田口 肇, 岡崎友紀, 前崎信也, 篠田博之, 「白磁の照明光色の違いによる色知覚と印象評価」, 日本色彩学会, 山形・山形大学米沢キャンパス, 2015年9月27日
2. 瀬谷安弘, 篠田博之, 「視覚誘導性自己運動知覚における上下非対称性」, 日本心理学会, 日本心理学会第79回大会, 愛知・名古屋国際会議場, 2015年9月23日
3. 山田翔吾, 篠田博之, 瀬谷安弘, 「昼光が入射する風景窓空間における空間の明るさ感評価」, 日本感性工学会, 第17回日本感性工学会大会, 東京・文化学園大学, 2015年9月2日

(6) 省庁、学会、財団などの表彰 運営委員会以外には開示しないことを希望する

■グループ3

1. 村本邦子, 「東日本大震災後の現地支援機関との協働関係構築プロセス ～「東日本・家族応援プロジェクト」の4年を振り返って～」, 第18回大会優秀発表賞, 日本コミュニティ心理学会, 2015年7月

(7) 外部資金獲得（競争的研究費、共同研究、受託研究、奨学寄附金等）

運営委員会以外には開示しないことを希望する

■グループ1

1. 競争的資金 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究B（平成27～29年度）（日本学術振興会）「夫婦の相互作用と生活家事遂行の過程の理解：個別具体的プロセスの記述に基づいた検討」, 滑田明暢（代表）, 計338万円
2. 競争的資金 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究（平成27～30年度）（日本学術振興会）「グローバル化時代における新しい心理学史の叙述」, 佐藤達哉, 計240万円
3. 競争的資金 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）新学術領域研究（研究領域提案型）（平成23～28年度）「三次元地層モデリングを用いた供述過程の可視化システムの構築」, 佐藤達哉, 計1420万円

■グループ 2

1. 競争的資金 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 (H25-H27) (文部科学省)「インクルーシブ社会に向けた支援の<学=実>連環型研究」, 稲葉光行 (代表), 計 3,600 万円 (H26 年度のみ)
2. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (H27~H29) (日本学術振興会)「黙秘権放棄が認められる法的・制度的条件についての研究」, 瀧野貴生 (代表), 計 200 万円
3. 競争的資金 科学研究費補助金・基盤研究 (C) (H27~H29) (日本学術振興会)「立方体型情報ビューアーによる視覚的データ管理手法の構築」, 斎藤進也 (代表), 計 377 万円
4. 競争的資金 科学研究費補助金・研究成果公開促進費「学術図書」, (H27) (日本学術振興会)「法心理学への応用社会心理学アプローチ」, 若林宏輔 (代表), 計 110 万円

■グループ 3

1. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤研究 C (H25~H27) (日本学術振興会)「ライフとキャリアの変容・維持過程の記述—臨床と教育に生きる質的研究法 TEM」, 安田裕子 (代表), 計 370 万円
2. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤研究 B (H26~H28) (日本学術振興会)「治療的司法論の理論的展望と日本の展開—当事者主義司法の脱構築に関する学融的研究」, 指宿信 (代表), 安田裕子 (分担)
3. 競争的資金 科学研究費補助金・基盤研究 B (H26~H28) (日本学術振興会)「家事事件当事者の合意による解決と家事調停・メディエーション機能の検証」, 二宮周平 (代表), 金成恩 (分担)

■グループ 4

1. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤研究 C (一般) (H27~H29) (日本学術振興会)「親密な関係性における暴力加害者の特徴と暴力から離脱する過程の臨床社会学的研究」, 中村正 (代表), 計 455 万円
2. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤研究 B (一般) (H26~H28) (日本学術振興会)「治療的司法論の理論的展望と日本の展開: 当事者主義司法の脱構築に関する学融的研究」, 指宿信 (代表), 統括, 計 1,183 万円
3. 競争的資金 科学研究費補助金 新学術領域「法と人間科学」(H23~H27) (日本学術振興会)「取調録画と裁判員裁判—取調べ過程の可視化をめぐる制度構築と裁判員裁判への影響」, 指宿信 (代表), 統括, 計 1,170 万円
4. 受託研究 日弁連法務研究財団 (2014.12.1-2015.11.30)「情状弁護の質的転換に関する研究: 更生支援型弁護の展開とその可能性」, 指宿信 (代表), 統括, 計 50 万円
5. 競争的資金 真宗総合研究所 一般研究 (H27) (大谷大学真宗総合研究所)「触法知的障害者の更生と地域定着支援を促進するピアサポートプログラムの研究の開発と評価」, 脇中洋 (代表), 計 88 万円
6. 競争的資金 科学研究費補助金 新学術領域研究「法と人間科学」公募研究 (H26~H27) (日本学術振興会)「法律に対する市民の違和感を規定する要因の心理学的検討」, 山崎優子 (代表), 計 270 万円
7. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤 C (一般) (H26~H28) (日本学術振興会)「裁判員裁判における量刑の格差是正に関する実証的研究」, 山崎優子 (代表), 計 455 万円
8. 競争的資金 日本学術振興会 (H27), ひらめき☆ときめきサイエンス「模擬裁判に参加して被告人に対する判決を考えてみましょう」, 山崎優子 (代表), 計 36 万円

■グループ 5

1. 競争的資金 科学研究費補助金 基盤研究 (C) (一般) (H27~H29) (日本学術振興会)「究極の視覚 UD としてのアダプティブ視環境の創造」, 篠田博之 (代表), 瀬谷安弘 (分担), 計 468 万円

2. 競争的資金 科学研究費補助金 若手研究 (B) (H25~H27) (日本学術振興会)「接近・後退運動する物体を追従時の注意の空間的移動特性に関する心理物理学的研究」, 瀬谷安弘, 計 416 万円
3. 競争的資金 科学研究費補助金・若手研究 (B) (H25-H27) (日本学術振興会)「空間の明るさと影の知覚に基づいた明度知覚モデルの構築」, 徳永留美, 計 416 万円

(8) 特許 運営委員会以外には開示しないことを希望する

① 出願

該当なし

② 取得

該当なし

(9) その他(報道発表、講演会等) 運営委員会以外には開示しないことを希望する

① 報道発表

■グループ2

1. 稲葉光行, 「「冤罪Gメン」の活動に協力いたします」, 冤罪撲滅ブログ(兵庫県議会議員北川やすとし氏運営), 2015年8月25日
2. 稲葉光行, 「日本版イノセンス・プロジェクト準備室」, J-WAVE「JAM THE WORLD」, 2015年7月29日
3. 稲葉光行, 「えん罪被害者の救済について」, NHK「NewsWeb」, 2015年7月7日

■グループ3

1. 村本邦子, 京都新聞現代の言葉「キューバとアイスクリーム」, 京都新聞夕刊2015年8月22日
2. 村本邦子, 京都新聞現代の言葉「心の防災」, 京都新聞夕刊2015年6月23日

■グループ4

1. 指宿信, 「ニュースを問う(名駅暴走で懲役12年の判決)発達障害, 立ち直りの司法を」, 中日新聞4面, 2015年7月5日
2. 中村正, 「[児童虐待の深部]虐待 親の更生支援 民間プログラム広がる」, 読売新聞(大阪朝刊), 31面, 2015年6月30日
3. 指宿信, 「警察当局「威力」に期待(携帯GPS通知見直し)」, 四国新聞21面, 2015年6月25日
4. 指宿信, 「GPS捜査に「待った」令状なし「プライバシー侵害し違法」割れる司法判断」, 朝日新聞35面, 2015年6月6日
5. 指宿信, 「GPS捜査「違法」」, 中日新聞3面, 2015年6月6日
6. 指宿信, 「令状なくGPS捜査, 違法 大阪地裁「プライバシー侵害」証拠採用せず」, 朝日新聞(大阪版夕刊)1面, 2015年6月5日
7. 指宿信, 「冤罪防止 揺らぐ原点 (刑事司法改革法案 衆院委審議)」, 西日本新聞3面, 2015年6月3日
8. 指宿信, 「(私の視点)GPS情報 捜査利用, 立法で手当てを」, 朝日新聞17面, 2015年5月14日
9. 指宿信, 「こちら特捜部(携帯GPS捜査 使用緩和)」, 東京新聞29面, 2015年4月22日
10. 指宿信, 「携帯GPS情報, 捜査「解禁」本人通知せず 国指針見直し案」, 朝日新聞, 39面, 2015年4月17日
11. 指宿信, 「刑事訴訟法改正案」, 北海道新聞11面, 2015年4月17日

② 講演会等

■グループ 1

1. 木戸彩恵, 「装身百様」, ライスボールセミナー特別企画『ブースセッション〜研究者を身近に感じてみよう〜』, 立命館大学, 2015年7月14日
2. 木戸彩恵, 「化粧を語る・化粧で語る」, ライスボールセミナー, 立命館大学, 2015年5月12日

■グループ 2

1. 斎藤進也, 「情報視覚化プラットフォームの構築: 学術的意義と創作的側面」, 2015年度第12回ライスボールセミナー, 立命館大学衣笠キャンパス, 2015年7月7日.
2. 斎藤進也, 「作品の比較を支援するための情報システム —分析視点の視覚化から—」, 第18回DH拠点セミナー, 立命館大学アート・リサーチセンター, 2015年6月17日.

■グループ 3

1. 安田裕子, 「TEM 図の描き方のひとつの例—ワードマップ実践編より」, TEA・東京研究会, 東京都文京区・東京大学, 2015年8月6日

■グループ 4

1. 指宿信, 「GPS 利用捜査の法的性質」, 明治大学, 2015年9月24日
2. 中村正, 「ライフストーリーワークの社会的歴史的意義—諸外国との比較を踏まえて」, 児童自立支援全国幹部研修会講演, 埼玉県さいたま市, 国立武蔵野学院, 2015年9月15日
3. 中村正, 「ハラスメント加害者への対応」, 大阪樟蔭女子大学講演会, 2015年9月10日
4. 中村正, 「ハラッサーを更生させるには」, 第21回キャンパス・セクシャル・ハラスメント全国ネットワーク大会, 名古屋市, 相山女学園大学, 2015年8月30日
5. 中村正, 「家族を考える支援者支援セミナー講演会」, 青森県下北児童相談所, むつ市中央図書館, 2015年8月28日
6. 中村正, 「ライフストーリーワークについて」, 大阪市児童自立支援施設阿武山学園講演会, 大阪府高槻市, 2015年7月21日
7. 中村正, 「暴力を振るう男性の心理とは」, ウィメンズカウンセリング名古屋YWCA講演会, 名古屋市, 2015年6月27日

■グループ 5

1. 篠田博之, 「色彩の生理学・心理学(1)」, 色彩講座基礎編2015, 京都・立命館大学朱雀キャンパス, 2015年8月30日
2. 篠田博之, 「人の視覚特性と光・色彩工学への応用」, 電気設備学会関西支部総会記念講演会, 大阪・中央電気倶楽部, 2015年5月29日

③ その他

■グループ 3

1. 安田裕子, 「体験企画 性格診断(エゴグラム)で心理テストを体験してみよう!」, 総合心理学部オープンキャンパス, 茨木市・立命館大学, 2015年8月1-2日
2. 安田裕子, 「模擬授業 総合心理学部の授業を体験しよう②『臨床心理学の one of 古典理論から学ぼう』」,

総合心理学部オープンキャンパス，茨木市・立命館大学，2015年8月1日

3. 安田裕子，「科研費を獲得しよう—申請書作成のヒント」，日本学術振興会表彰者が語る！科研費獲得の心得，京都市・立命館大学，2015年7月29日
4. 安田裕子，「科研費を獲得しよう—申請書作成のヒント」，日本学術振興会表彰者が語る！科研費獲得の心得，京都市・立命館大学，2015年7月29日
5. 安田裕子，「大学教員応募セミナー—採用側からの視点— 模擬講義」，若手研究者キャリアパス支援プログラム，京都市・立命館大学，2015年6月9日
6. 金成恩，「DV・高葛藤の事案と面会交流の取組み」，ライスボールセミナー，立命館大学，2015年5月19日
7. 安田裕子，「日本学術振興会特別研究員申請 申請内容ファイル作成のポイント」，2016年度 日本学術振興会特別研究員申請ガイダンス，草津市・立命館大学，2015年4月3日
8. 安田裕子，「日本学術振興会特別研究員申請 申請内容ファイル作成のポイント」，2016年度 日本学術振興会特別研究員申請ガイダンス，京都市・立命館大学，2015年4月1日

■グループ4

1. 山崎優子（代表），日本学術振興会 ひらめき☆ときめきサイエンス「模擬裁判に参加して被告人に対する判決を考えてみましょう」を開催，2015年8月2日
2. 指宿信，研究会オーガナイズ，「被疑者取調べ録画研究会」，京都弁護士会館，2015年7月3日
3. 指宿信，研究会オーガナイズ，「治療的司法研究会」，キャンパスプラザ京都，2015年6月29日
4. 指宿信，大阪地方裁判所専門家証人プレゼン，「GPS 利用捜査の法的性質」，大阪地方裁判所，2015年5月14日

■グループ5

1. 徳永留美，篠田博之，「人の顔色のバリエーションと応答の恒常性について」，コスメティクスと肌・顔研究会 第2回研究発表会，東京・産業技術総合研究所臨海副都心センター，2015年4月23日
2. 徳永留美，「目撃証言における顔の色名について～誰もが同じ色名で証言するのか～」，ライスボールセミナー，立命館大学，2015年4月21日

以上

拠点名：法心理・司法臨床センター

拠点リーダー名： 稲葉光行

2015年度
前期

研究開始	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	研究終了
拠点全体 (リーダーズ・ミーティングで企画・運営を行う)	<ul style="list-style-type: none"> 法心理・司法臨床センター設立準備 国内外の研究者ネットワーク構築 	<ul style="list-style-type: none"> 法心理・司法臨床センターを設立(後期) 国内外の研究者と実務家ネットワーク構築 	<ul style="list-style-type: none"> 法心理・司法臨床センターの展開。 法心理・司法臨床に関する支援の社会実装。 	<ul style="list-style-type: none"> 法心理・司法臨床センターの展開。 日本「法と心理学会」開催 環太平洋「法と心理」学会開催 	法心理・司法臨床に関する総合的ワンストップサービスの確立
グループ① 法心理の原理探求と新領域展開 リーダー名：サトウタツヤ	<ul style="list-style-type: none"> 社会問題に関する法心理の可能性に関する議論レビュー。 海外における同種のサービス事例調査。 	法心理・司法臨床研究者のための国際的ハブ構築の準備	法心理・司法臨床研究者のための国際的ハブ構築	<ul style="list-style-type: none"> 研究者、実務家、市民のための、法心理・司法臨床に関する総合的ワンストップサービスのための知見統合 	法心理・司法臨床学研究の方法論の体系化と発信
グループ② 裁判員裁判の法心理 リーダー名：稲葉光行	<ul style="list-style-type: none"> 裁判員支援のための技術動向調査 心理学および情報学な技法とツールの整備 	<ul style="list-style-type: none"> 裁判員支援のための技術動向調査 心理学および情報学な技法とツールの整備 	<ul style="list-style-type: none"> 裁判員および実務家を対象とした支援の試行 被害者、加害者双方に対する支援のためのワンストップサービスの拡充 	<ul style="list-style-type: none"> 環太平洋における、法心理・司法臨床に関する学術と実践の支援拠点の確立 視知覚を含む心理学的鑑定に関する新手法の確立 	裁判員支援のための可視化ツールおよび分析技法実用化
グループ③ 被害者支援 リーダー名：松本克美	<ul style="list-style-type: none"> 被害者問題に関する事例・判例の調査。 家族問題の法的対応に関する国内外の事例調査 	被害者、加害者双方に対する支援のためのワンストップサービスの試行	⇒達成率80%	⇒達成率80%	被害者に対するトータルな支援モデルの提言
グループ④ 司法臨床と治療的司法 リーダー名：中村正	<ul style="list-style-type: none"> 被害者問題に関する事例・判例の調査。 家族問題の法的対応に関する事例調査 	被害者、加害者双方に対する支援のためのワンストップサービスの試行	被害者、加害者双方に対する支援のためのワンストップサービスの試行	被害者、加害者双方に対する支援のためのワンストップサービスの試行	加害者を生まない制度と社会的支援政策の提言
グループ⑤ 科学鑑定の基本技術と法理 リーダー名：篠田博之	<ul style="list-style-type: none"> 視知覚鑑定に関する事例調査。 心理学鑑定に関連する法知識の整理。 	<ul style="list-style-type: none"> 目撃証言・自白供述の鑑定が取り扱う視知覚条件の抽出。 既存知識による検討と不足するデータ項目の整理。 	<ul style="list-style-type: none"> 不足するデータを得るための視知覚実験の計画と実施。 心理学的鑑定をする際の留意点の抽出と新手法の検討。 	<ul style="list-style-type: none"> 不足するデータを得るための視知覚実験の計画と実施。 心理学的鑑定をする際の留意点の抽出と新手法の検討。 	視知覚鑑定手法確立、および視知覚心理学の鑑定ハンドブック化

目標

冤罪を防止する
手法と技術の整備

目標

犯罪被害者を減らす
社会制度の実現

拠点の最終目標：「公正・公平な社会実現」を目指す法心理・司法臨床分野の世界的拠点形成

グループ研究課題名: 法心理の原理探求と新領域展開

グループNO: 1 グループリーダー名: サトウタツヤ

2015年度
前期

研究開始	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	研究終了	
<p>チーム①研究課題名: 法心理の原理探求</p> <p>リーダー名: 佐藤達哉</p>	<p>学融のためのモード論の組み替えにより、日本の法心理実践の枠組みを作る。</p> <p>法心理思想史構築のための法思想・制度史と心理学史の検討。</p>	<p>問題解決型学融の理論の構築。</p> <p>17/18世紀における欧米の法思想の展開と心理学史前史の接続。</p>	<p>日本における法制度史・法思想史の理解に基づき法心理不在の理由検討を行う。</p> <p>19世紀以降の欧米の法思想の展開と心理学史の接続。</p>	<p>欧米および日本における法心理思想史の確立。</p> <p>⇒達成率70%</p>	<p>学融の方法論の確立。 法心理思想史の確立。</p>	<p>目標 近代における法・統治と人間理解のあり方の理解</p>
<p>チーム②研究課題名: 法心理の新領域展開</p> <p>リーダー名: 渡辺千原</p>	<p>社会問題に関する法心理の可能性に関する議論レビュー。</p> <p>事実に関する方理論と自然科学理論、社会学理論の乖離の検討。</p>	<p>被災地の社会問題と法の連携の過去事例の検討。</p> <p>本拠点参加者の「事実」に関する理論的根源の共有</p>	<p>民事相談の新しい手法としてのネット相談について調査を行う。</p> <p>引き続き、事実の理論の検討を行う。</p>	<p>生活に密着した領域としての民事法と心理の理論を確立する。</p> <p>事実に関する法心理・司法臨床の理論を構築する</p> <p>⇒達成率90%</p>	<p>民事法・法社会学を中心とした新領域の確立。</p>	<p>目標 刑事法中心だった法心理から脱却</p>
<p>全体の課題</p> <p>法心理・司法臨床センターの設立と運営</p> <p>本グループリーダーを中心に全員で行う</p>	<p>同種の組織をもつ海外の大学の組織の研究</p> <p>学内規定等の調査</p>	<p>法心理・司法臨床センター運営のための基本的規則作りと人選</p> <p>後期から試行的に法心理・司法臨床センターを設立する。</p>	<p>研究は各グループの課題であるから、研究以外の実践業務や出張講義などの社会実装を試行的に行う。</p> <p>法心理に関するテキストの刊行</p>	<p>法と心理学会の開催および環太平洋「法と心理」学会の開催を通じて、法心理・司法臨床センターの認知度を高める。</p> <p>⇒達成率80%</p>	<p>協働研究を行う体制作り</p> <p>研究成果発信のシステム作り</p>	<p>目標 より豊かな法心理研究・実践の推進</p>

研究グループの最終目標:
市民感覚に基づく公正な社会を実現するための基本としての法心理の理論構築
法心理・司法臨床センターの設立と運営による上記目標の実現

研究開始	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	研究終了
<p>チーム① 公判前報道が引き起こすバイアスとその対策方法の提案 リーダー名: 瀨野貴生</p>	<p>諸外国の報道規制の手法について情報収集を行う。 特に、欧米圏での「裁判官の説示」の効果について情報を収集する。</p>	<p>日本で行われている事件報道のうち問題が指摘されている様々な報道の効果の測定。</p>	<p>公判前報道の効果に対する「裁判官の説示」の効果及び報道の規制方法の有効性について検討。</p>	<p>公判前報道による市民の予断形成を防止する手法の探索。 表現の自由と報道規制の関係に関する法理論的な検討。 ⇒達成率80%</p>	<p>裁判員裁判における報道の持つ影響力の特定と、それ報道による市民の予断形成を規制する手法の確立。</p>
<p>チーム② 裁判員が見る自白供述の「取調べ場面の録音・録画」が引き起こすバイアスの検討とその対策方法の提案 リーダー名: 浜田寿美男</p>	<p>部分的な「取調べの可視化」が裁判員に与える影響の測定。 ビデオ・アングルが与える影響(CPB効果)に関する研究のレビュー。</p>	<p>日本独自の取調べ録画手法(画面分割方式)におけるCPB効果の実験的検討(1)。 - 画面サイズの効果 - 分割画面の効果 - カメラ・アングル効果</p>	<p>日本独自の取調べ録画手法(画面分割方式)におけるCPB効果の実験的検討(2)。 - より効果的な画面配置の検討 - 録音のみの場合との比較</p>	<p>全面可視化(全過程録画)の必要性や社会的意義の検討。 二次元・三次元視覚化システムを用いた、可視化されたデータの参照および利用方法に ⇒達成率85%</p>	<p>取り調べの全面可視化と、その施行における法学的・心理学的・実践的に適切な手法の確立。</p>
<p>チーム③ 裁判員裁判の複雑な証拠・証言・会話に対する情報視覚化技術による制度支援 リーダー名: 稲葉光行</p>	<p>裁判での調書・証拠等の情報の利用法と意思決定プロセスの事例調査。 裁判での「情報の視覚化」と意思決定プロセスの改善に関する検討。</p>	<p>弁護士らとの連携による、裁判での証言・供述調書の二次元/三次元視覚化と分析の実践。 法律の非専門家としての裁判員に適した意思決定支援の可能性検討。</p>	<p>二次元・三次元視覚化システムを用いた模擬裁判員裁判の実施と情報呈示の実験。 視覚化システムを導入した場合の裁判員の理解度や意思決定への影響に関する検討。 テキストマイニング手法による評議過程の視覚化と国際比較。</p>	<p>二次元・三次元視覚化システムのユーザビリティ向上に関する検討。 裁判員を対象とした実用化に向けた視覚化システム改善。 陪審制度・参審制度の評議過程に関する国際比較と総合的検討。 日本における市民による司法参加のための ⇒達成率80%)提案。</p>	<p>裁判員裁判に対する情報視覚化技術による支援の有用性と必要性について示す。</p>

目標

裁判員裁判の制度的バイアスの抽出、そのバイアスの発生を防止する対策の提示

目標

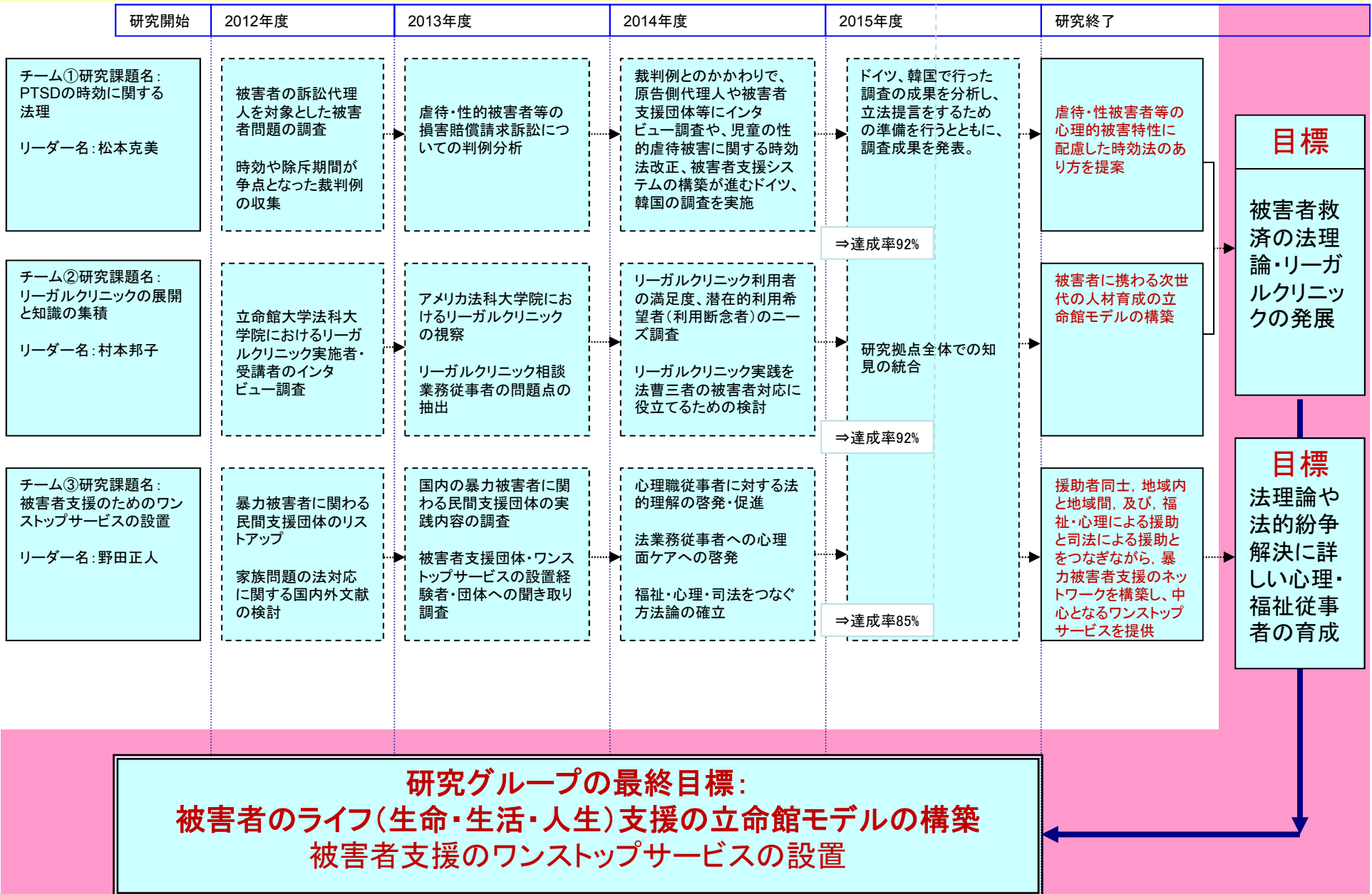
裁判員に対する認知的支援と、裁判員裁判の評価方法の確立

研究グループの最終目標: バイアス除去による裁判員制度における市民の適切な判断の支援

グループ研究課題名: 被害者支援

グループNO: 3 グループリーダー名: 松本克美

2015年度
前期



グループ研究課題名: 司法臨床と治療的司法

グループNO: 4 グループリーダー名: 中村 正

2015年度
前期

研究開始	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	研究終了
<p>チーム① 研究課題名: 加害者臨床による再犯防止と治療的司法の架橋</p> <p>リーダー名: 中村正</p>	<p>児童相談所を通じて虐待加害者の特性の調査。</p> <p>加害者臨床の基礎となる家族システム論の検討</p>	<p>20家族を目標に、加害親への調査を行う。</p> <p>虐待家族事例から共通に抽出できるシーケンスの「結節点」のように機能している社会的変数を解析。</p> <p>治療的司法の基礎文献の検討</p>	<p>虐待親とならざるを得ないモデル(道筋)を参考に、そうではなかったかもしれない状態(可能態)を可能にするための介入ポイントの探索的検討。</p> <p>治療的司法を日本に取り入れるための障壁の検討</p>	<p>加害親を社会内処遇するための条件の提案。</p> <p>虐待以外の加害者への転用可能性の追求。</p> <p>治療的司法への提案</p>	<p>児童虐待親を対象とした加害者臨床の実践知の構築と治療的司法の考え方の架橋</p>
	<p>知的障害のある犯罪者をジャスティス・クライアントとしてとらえる考え方の基本的なレビュー。</p> <p>他職種連携のためのモード論の検討</p>	<p>非行、虐待、DV、ハラスメント、ストーカー、などの行為者の研究は各領域で既になされているが、法と臨床の枠組みから捉えたジャスティス・クライアントの包括的共通特性、問題解決の要点の明確化</p>	<p>弁護士などの法律家、スクールカウンセラーなどの臨床心理士、児童相談所や女性相談所のケースワーカーなどを対象に、ジャスティス・クライアントに関わる専門家から他職種連携に関する聞き取り調査を行う。</p>	<p>知的障害者が加害者となった場合の、具体的な処遇方法の提案。</p> <p>他職種連携モデルの提案。</p> <p>根幹となる法学思想たる治療法学の検討。</p>	<p>⇒達成率90%</p> <p>チーム①、チーム③の知見をこのチームで統合する。</p> <p>法分野の他職種連携に関して、被害者支援グループのリーガルクリニック構築と知見を交換する。</p>
	<p>カナダなどの一審裁判所において取り入れられている問題解決型裁判所に関する調査。</p>	<p>問題解決型裁判所の背景にある、「治療的司法」と呼ばれるアプローチ、更にそのアプローチを支える「治療法学」と呼ばれる法思想について、相互連関を調査。</p>	<p>同種モデルの採用を実現させるための制度上、法律上の問題を明らかにし、社会内処遇として有罪判決回避のために投入可能なプログラムや関係諸機関の連携のあり方の調査。</p>	<p>問題解決型裁判所の実践に(日本の中では)近いとされる家庭裁判所における少年事件の治療法学的観点からのリフレーミング。</p>	<p>⇒達成率90%</p> <p>訴追側・被告人側を対置した当事者対抗訴訟モデルではなく、当事者協調的、且つ司法介入に焦点をあたえた治療重視の司法観の提案。</p>
	<p>2013年度以降の調査が可能になるようにコーディネートを行う。</p>	<p>現在の日本では実現していない考え方・制度であるため、海外の事例を調査する。</p> <p>調査対象と時期は下記を中心に行う。可能であれば海外の実践者・研究者・識者を招聘し相互交流を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・刑事司法手続に関与した障害のある人(Justice Client)への支援制度(オーストラリア ビクトリア州メルボルン) ・ナラティブ・セラピー(ニュージーランド・オークランド) ・人性教育プログラム(韓国大田矯導所) 	<p>⇒達成率60%</p>		
<p>チーム② 研究課題名: 法現象をめぐる他職種連携の実際</p> <p>リーダー名: 廣井亮一</p>					
<p>チーム③ 研究課題名: 出所者の社会内処遇と治療法学の可能性</p> <p>リーダー名: 森久智江</p>					
<p>チーム④ 研究課題名: 海外先進事例の調査</p> <p>リーダー名: グループリーダーが兼ねる</p> <p>担当者名: 全員</p>					

目標

触法行為者の類型別の社会復帰プログラムの開発

目標

他職種連携による新しい司法の形(治療法学)の提案

研究グループの最終目標: 加害者の社会包摂的な処遇による安全・安心な社会の実現

グループ研究課題名: 視知覚に関する心理学鑑定の技術と法理

グループNO: 5 グループリーダー名: 篠田博之

2015年度
前期

